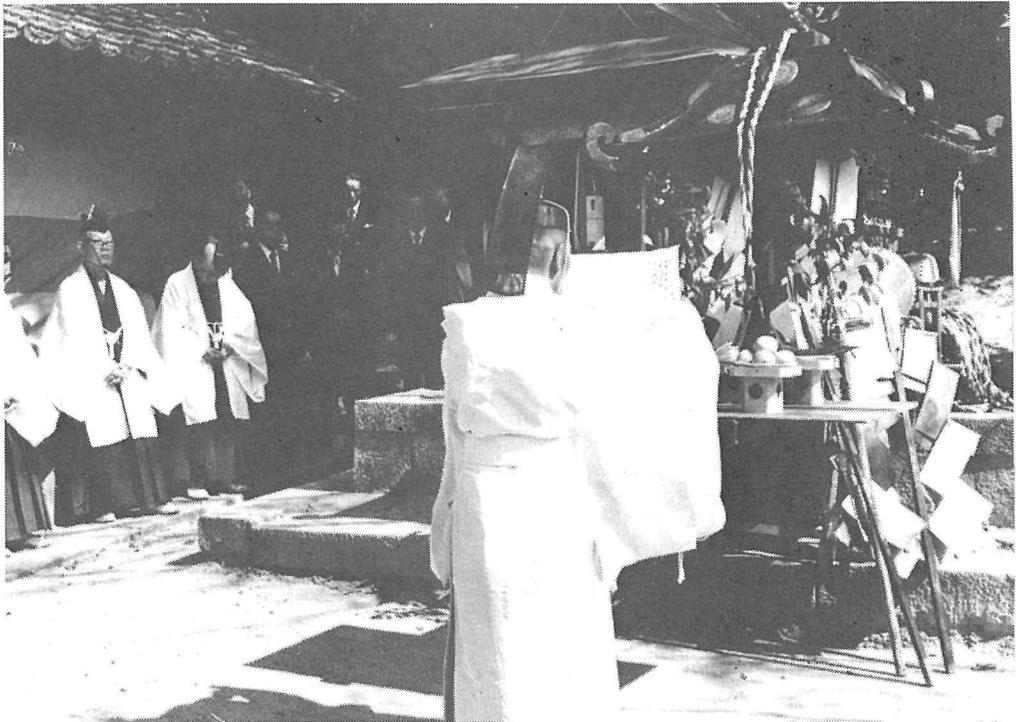


民俗博物館だより

Vol. XI No. 2

1984. 9. 25



▲神波多神社祭礼(山添村中峯山)

目 次

「大和の年中行事」展によせて(特別テーマ展特集).....	1
オコナイ(特別テーマ展特集).....	2
オンダ祭(特別テーマ展特集).....	3
虫送り(特別テーマ展特集).....	5
風祈禱(特別テーマ展特集).....	6
雨乞い(特別テーマ展特集).....	8
秋まつり(特別テーマ展特集).....	9
民俗公園短信・お知らせ・他.....	11

「大和の年中行事」展によせて

山本 實

今秋の特別テーマ展「大和の年中行事—稲作とまつり—」では、大和すなわち奈良県下に遺っている行事、現存していないが言い伝えを残している行事、そしてその伝承と祭具をもつ行事など様々な姿を私たちにみせてくれる。

これらの行事の中で、御田植祭（オング）、野神まつり、虫送り・虫祈祷、雨乞・雨乞踊、秋まつり、風祈祷、そして修二会（オコナイ）などの祭礼を中心に展示で紹介し、行事を営む農村の人びとのもつ意図する姿を観て貰いたいと考えている。

これらの行事から共通する内容や異なる形態を、祭礼の用具や文書などによって、大和の農耕にかかわる年中行事の特徴を捉えて貰うことも、展示の目的の一つでもある。

たとえば、行事の祭具で共通するものがみられる。この共通する祭具が、御田植祭や野神まつりや亥の子まつりで使われていること、野神まつりの蛇が地域によって異なること、そして秋まつりで使用される祭具などが同じものであることや異なるものであることも展示の資料から窺える。また、展示している文書から、これらの行事・祭礼で、古く室町時代にまで遡る秋まつり、江戸時代にはすでに行なわれていた野神まつりなどがあることも観てもらえればと思う。さらに、これらの文書から行事の古さをこの機会に理解して貰えればと考えている。

たとえば、大和高田市今里の野神まつりが、江戸時代後半にはすでに行なわれていたことを、当屋の文書から窺える。そして、曾爾村今井、外数ヶ大字の営む門僕神社の秋まつりが、室町時代後半にはすでに行なわれていたこともわかる。これ以外の秋まつりも室町時代には営まれていたことを知ることができる。

一方、これらの農耕とかかわる年中行事の内容についてみると、芸能的な要素を帯びたものがある。

たとえば、雨乞習俗の一つである雨乞踊のほとんどは現存していないが、奈良市大柳生の太鼓踊、秋まつりの一つである山添村中峯

山の神波多神社の渡御祭にみられる田楽、そして修正会（オコナイ）行事である五條市大津の鬼走りなどは、芸能的な内容をもちあわせていると思える。

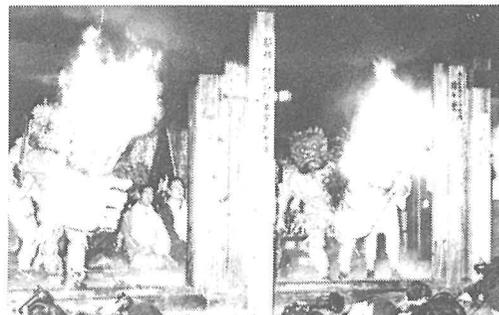
このように大和で今日まで受け継がれている年中行事には、多種多様な内容の祭礼があるが、これらの祭礼も、農村において培われてきたものである。そして、農村における年中行事の多くは、村々の農耕を媒介にした〈神〉への祈りや願いを表現するものでもあったと考えられる。

この〈神〉への祈願を通して、農耕におけるマツリの原点や、このマツリをとおして〈人〉と〈人〉の結びつきを考える契機となればと思う。

このこと（すなわち農村における年中行事の基盤が神への祈願であり、この祈願が人々によって行なわれてきたということ）を展示を通じて理解して貰えれば、今回の特別テーマ展の所期の目的は果し得たと考えていると共に、「年中行事」が存在してきた事由を新たに思い巡らせて貰いたいと思っている。



▲野神まつり（御所市蛇穴）



▲オコナイ（五條市・念仏寺）

（館長）

オコナイ

浦西 勉

奈良県下においてオコナイと呼ばれている行事がある。正月か二月頃、農村で神社や神社の脇のお堂で行事がなされるもので、県内では、山辺郡(奈良盆地東部の山間)とその周辺の村落で色濃く分布している。農村にとって、春先に稲の豊作を乞い願った行事(あらかじめ願い祝う意味で予祝行事と言う)として、大切な行事として存在しているように思われる。

さて、農村においては、このオコナイの呼び名は、ランジョウ、ショウゴン、初祈祷、修正会などと呼ばれているが、ここでは統一してオコナイと言っておく。これらは、行事の内容によって村人が呼びならわしたために、様々な呼び方になっているが、農村において、村の鎮守の社、ないしは寺(堂)にて、僧侶が導師となって行われ、村人は行事の準備として、花餅(餅)という供えものや飾りをし、行事内容にランジョウ(乱声)、ユミウチ、カンジョナワなどをし、牛玉札をつくるという行事内容は同じなのである。この行事は、神前、仏前において祈られた牛玉札が重要で、村人達はこの札を持って帰り、春の糰まきの水口に立て五穀豊饒を願うのである。

さて、今回の特別テーマ展においては、五條市大津の念仏寺の鬼走りと呼ばれるオコナイと、野迫川村北今西のオコナイと桜井市滝倉のオコナイを紹介することにした。それぞれ、オコナイの行事の特色がよくうかがえると思われる。つまり、五條市の場合には鬼が大松明で火ふりをかざす豪快なもので火まつり、鬼走りなどの要素、野迫川村の場合、仏前の飾りが実に荘厳であり、飾りたてるという行事の要素などをうかがうことがよく理解できよう。これら五條市大津念仏寺の鬼走りと野迫川村北今西のオコナイはそれぞれ奈良県無形民俗文化財に指定されている行事である。

ここでは少し詳しく桜井市滝倉のオコナイを紹介しようと思う。オコナイ行事は本来1日で終了してしまうのではなく、東大寺のお水取りで知られる二月堂の修二会は二週間おこなわれるごとく、村落でも何日間も続いた

のではないかとと思われる。この桜井市滝倉のオコナイは実に2月1日から14日まで連続している行事であり、その点古風をとどめていると思われる。

行事は2月1日から始められる。一老から六老までの上六人衆と行事(行司などと呼ばれ、七老以下の人が順に当る)役とが、滝倉神社神前にて行事をする。行事内容は、一老はキン、二老から四老までは錫杖を持ち、五老はほら貝を吹く。六老は太鼓を打ち、行事の役の人は準備をする。夕刻頃から神前で般若心経を唱え、三反唱え終わると、錫杖、ホラ貝、太鼓を約1分間打ちならしあう。これを3回くりかえす(以前は5回くりかえした)。ここでは、乱声とは言わないが、乱声に当るものか。この行事は9日まで行われている。この9日間のうち6日の日は村人全員(宮座に入っている人全員)が神社の脇の神宮寺(今は社務所)に集り御供(餅)つきをする。御供は21升と定っており、7臼つく。その内、4臼目は千本杵でつき、この餅で餅花を作る。またカラスの餅も作る。あとは平たい丸餅を作る。全部つき終わると、臼をその年のアキの方にたおす。この御供つきの間、一老から六老までは拝殿にて、花カズラと牛玉さんをつくる。花カズラとはフジの木と竹によって作られ弓形にしたものである。牛玉さんとは、木版に「牛玉宝印、滝倉山」とありこれを刷り、柳の枝にはさんだもので、村の戸数分作る。これが作り終わると、一老から六老までの上六人衆は御供の作られている神宮寺へゆき、御供のできぐわいを見て昼食になる。昼食は各自持参だが、当屋(正月当)からはゴボウとコンニャクなどを用意する。食事が終わって、御供と花カズラと牛玉さんとが神前に飾られ、上六人衆の行事がある。7日は、正月当の神さん(祠)が前年の当屋から、滝倉神社の拝殿にはこぼれ、この前に6日に作った供え物や花カズラや牛玉さんを飾る。この神さんは13日までここにいる。7日の正月当の神さんの移動が終わると、上六人衆が毎

日している行事を行う。このあと、翌年の正月当を受ける人と三々九度をかまし、行事が終わる。このあとお堂で直会となる。8日はカスクイといって、オコナイの準備などに参加した人々の食事となる。続いて12日はケイチンと呼ぶ弓打式がある。場所は行事の役の家にて一老から六老までの人で営まれる。13日は神社拝殿にまつた正月当の神さんの祠を、翌年の正月当の家まで運ぶ行事でオシメイリと言う。14日はこの正月当の家で座入り



▲牛玉をつくる(桜井市滝倉)

とって村人を呼んで食事をするのである。このようにして2月1日から14日まで続いた行事が営まれており、オコナイ行事の古い形態が今も生きづいていられる。

奈良県内の村落でこのように長期間行事が続けられているオコナイは少ないが、東大寺の修二会、長谷寺の修正会、法隆寺の修正会などは何日間も続けられている行事であり、このような修正会が村落のオコナイとして入ってきたものと思われる。



▲オコナイの行事(同左)

特別テーマ展特集

大和の御田植祭

大宮守人

○祭の形態

奈良盆地を中心に今日も行われている「おんだ祭」は、30以上を数えることができるが、これらの祭の中には大別して3種類の形態のものが見られる。

①「しぐさ」に台詞または歌謡が付随するもの。②台詞などはなく、模擬的な農耕の所作を無言のうちに進めるが、牛への砂かけや御供、松苗の奪い合いなど暴れ祭りの傾向があるもの。③単に神主による神前での祈祷のあと参拝者に松苗を配るだけのもの、の3種である。

当館で調査した奈良県内の「おんだ祭」33件(注1)のうち①の類は9件あり、手向山八幡宮(奈良市雑司町)・吉野水分神社(吉野町吉野山)・植槻八幡神社(大和郡山市植槻町)・平尾水分神社(宇陀郡大宇陀町平尾)・大神神社(桜井市三輪)・六県神社(川西町保田)、以上6社には台詞があり、春日大社(奈良市春日野町)・広瀬神社(北葛城郡河合町川合)・野依白山神社(宇陀郡大宇陀町野依)、以上3社

には歌謡がある。

②の類は、33件のうち18件であったが①にも概ね暴れ祭の傾向を含んでおり、広瀬神社の場合では砂を掛け合う部分が多量にも激しいので通称「砂かけ祭」と呼ばれ、「おんだ祭」における暴れの典型となっている。

③の類は残り6件で、②と同様であったものが、簡略化した場合も多いと考えられる。

○祭日について

調査した33件のうち、1月(7件)、2月(17件)、3月(3件)、4月(3件)、5月(1件)、6月(1件)となっており、祭日が2月に集中している。

このことは、「おんだ祭」が稲の豊作を祈願する「祈年祭」(としごいのまつり)としての性格を持った神事であることを示唆していると考えられる。

祈年祭は、宮廷を中心とした古代国家の春祭りといえるものでその年の穀物の豊作を祈念する祭儀であった。宮廷での祈念祭は本来は民間で行われていた田の神に対する祭が宮

延の儀式として取り入れられ2月4日の祈年祭として神祇官の祭儀となったと推定されている。^(注2)

しかし大和地方の「おんだ祭」の多くが古代律令体制下の名残りをとどめるものであるという文献的資料は今迄のところ明らかにし得ない。むしろ、明治2年に国家神道整備の中で、神宮（伊勢神宮）の祈年祭が復活し、翌年より宮中8神および全国諸社の祈年祭が行われ、明治4年には祈年祭の布告が出されたことの影響を強く受けている一面もあり、③の類の「おんだ祭」はこの例と考えられる。

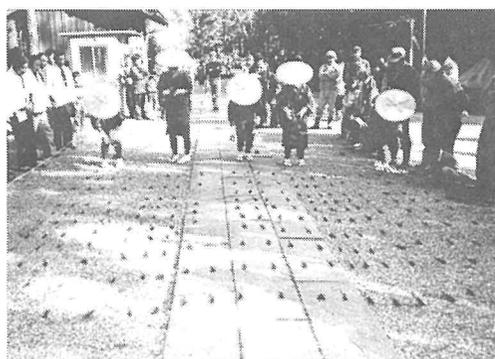
もともと初春の予祝儀礼として村々の氏神



▲ 植槻八幡神社(大和郡山市植槻) 鋤を使う所作



▲ 同 上 牛を使う所作



▲ 大和神社(天理市新泉)早乙女による田植の所作

の神前などで「おんだ祭」が行われていたところへ、明治4年の祈年祭式典に従った結果、本来の「おんだ祭」の色彩が後退し、松苗の授与の部分にその名残をとどめることになった例であろう。しかし一方広瀬神社の「御田植祭の沿革」^(注3)には、

「本社祭神若字賀能賣命は水穀守護の神であってこの神事もその淵因を此處に有するのである。白鳳年中より永正年中まで當國六郡の刀禰等参集して御田植並水口祭禮及水府舞行われし旨社記に記されてある。

其後中絶せしを元禄年間に再興し古式を追慕して陰曆正月十二日を以て執行したのを明治四十二年以後二月二十一日改め更に大正四年に至って祈念祭と抵觸するを以て二月十二日に変更されたものである。」

とあり、祈年祭との抵觸の中で分離して行われるようになった事実が述べられている。

この広瀬神社の例に見るように、分離して「御田植祭」を維持してきた背景には、通称「砂掛祭」とも呼ばれる暴れ祭りが、季節の順調な推移と天候の安定、また労働力の中核となるべき家族や牛の健康を祈願し、無事豊作への強い期待を現わすのにふさわしい姿であったと思われる。順調に稲作の作業が進められるようにという気持を現わす農耕の所作、また稲にとって必要な時期に良い雨に恵まれるようにという砂掛け合戦に飛び交う砂を雨に見たてる伝承などは大和地方の「おんだ祭」の底流をなすものであろう。

今日も続けられているこの祭りの姿がいつ頃から続いているものかは不明であるが、中世の文献にも「御田植」^(注4)の記事が散見できる。しかし、今日のものと同じ姿であるかどうかを知る事は、それらの記述では不可能であるが、かつては、正月の年頭の行事として行われていたことは共通した事実といえることができる。

(注1) 奈良県立民俗博物館研究紀要 第5号「県内御田植祭の詞章について」

(注2) 日本歴史大辞典(3)「祈年祭」上田正昭 [河出書房]

(注3) 広瀬神社社務旧議綴祭儀「昭和八年二月御田植祭ノ塚田主典ノ記録」

(注4) 『大乘院寺社雑事記』『多聞院日記』には春日社の「御田植」が頻出する。



虫 送 り

徳田陽子

『除蝗録』(大蔵永常著 文政9(1826)刊)の「蝗をくりの説」の中に、

我国にてはいつ頃より始りしと云事詳らかならざれども、今諸州一統虫送りとて黄昏より一村集て松明を燈し鐘太鼓をならし(中略)螺を吹き鯨波をあげ蝗遂と号し田の畦を巡り、その松明を引て田に遠き野辺或ハ河原に捨れば付添来れる蝗悉く焼れて死す。

と書いてあるような虫送りが、県下にもいくつか現存している。ところによっては、田の虫送りとともに、害虫の多く発生しやすい6月上旬から7月にかけて行われる。

今回の特別テーマ展では、その中でも地域的によくまとまって残っている笠間川流域の虫送りの内、室生村小原の虫送りに使う数珠、太鼓・鉦・松明や山添村毛原の祈祷札などを展示したので、ここでは、この地域全体の虫送りの現状に焦点を当ててみていきたいと思う。

下流で名張川に合流する笠間川流域のほとんどの地域で、昔は、松明を持って虫送りをしていたが、現在は、室生村東無山・小原・下笠間の3ヶ所で行っているだけである。今の虫送りの内容を分けてみると、

- ①村落内の寺で読経や数珠繰りをして虫の祈祷をし、虫の供養をする。
- ②村落内に害虫が入って来ないように、寺から授与された祈祷札などを村落の境にたてる。
- ③松明を持って虫送りをする。

以上、3つの形式があり、その目的には、害虫駆除と虫の供養の2つがある。

虫送りは、笠間川の上流から順々に行われる。6月16日には都祁村吐山で数珠繰り、室生村東無山で読経と祈祷札と虫送り、多田・染田で祈祷札、夏至前日には室生村小原で読経と数珠繰りと虫送り、夏至には室生村下笠間で祈祷札と虫送り、6月28日には山添村毛原・岩屋で読経する。

毛原を例にとってみよう。毛原では、6月

28日の正午に毛原神社に、約50軒の家から戸主がコモリ箱を持って集まり、昼食を共にして、ウエツケコモリをする。このとき、ケガレのある人は、長久寺に籠るが、寺の住職は本堂を貸すだけで、行事には関与しない。ウエツケコモリは、午後2時すぎに終わり、家に戻る。

10年程前までは、この日の夜、虫送りがあった。長久寺は、真言宗の寺である。住職が「御祈祷札」と彫ってある版木を半紙に刷って、その下に「豊原山 長久寺」と墨書した祈祷札と杉の葉を竹の先に挟む。御幣も作って、別の竹に挟み、本堂で祈祷しておく。

村人は、180cm前後ぐらいの長さに細長く割った竹を重ねて縄などでくくった先に、菜種の殻か枯れた杉葉を詰めた松明を、各家で準備する。

夜、7時に、寺に村人が集まり、本堂の灯明の灯で松明に火をつける。ケガレのある人は参加できない。子供達が祈祷札と御幣を持って先頭にたち、次に住職、そのあとに松明を持った村人が続いて虫送りが始まる。カイ(ほら貝)を持っている4、5軒の家の人は、松明行列の中に適当に加わる。そして、旧道を通って岩屋境の堀割まで行き、祈祷札と御幣をたて、住職が不動明王の真言を唱えてから、直会をして終わる。

毛原では、この虫送りをやめてから、現在のように、村の役員など10人余が、夜の7時に寺に集まって、住職が読経して、虫の供養をするようになった。

以上のことから、毛原では、ウエツケコモリと虫送りが同じ日にあったことと、10年程前に虫送りをやめたとき、一緒に祈祷札もなくなり、読経を寺ですするという内容に変わったことがわかる。

毛原と同じようにウエツケコモリと虫送りを一緒にしていたところには、室生村下笠間と山添村岩屋があった。この2つの行事は、ウエツケコモリで豊作祈願をし、豊作のための具体的な行動の一つとして虫送りを行うと

いう一連の行事としてみる事ができよう。しかし、現在は、下笠間のように、村人の集ししやすい日曜日に変更したところもある。

このように、虫送りの行事は仏教的な要素の濃い内容である。現存する虫送りの内容は村落ごとにいろいろに変わっているが、一つの流域で上流から下流へ月日をずらして行っているのは昔から同じで、そこに、同じ水源を利用する村落間の横の強いつながりを垣間見ることできる。



▲虫送りの数珠繰り(都祁村吐山城福寺)



▲虫送り(室生村小原)

特別テーマ展特集

風 祈 禱

横山浩子

稲がさまざまな試練に耐え、ようやく開花結実をむかえる頃には、二百十日・二百二十日の台風襲来の季節でもある。このような時期に行われる除災祈願の行事がいわゆる風祈禱である。

県内で風に関わるまつりといえば、まず誰もが思い浮かべるのは龍田大社の風鎮祭であろう。それは、6月末から7月初頭にかけて7日7夜に渡って行われ最終日の大祭には、



▲風籠り(都祁村吐山)

龍田神楽の他、崇敬者による伊勢太神楽、風鎮太鼓など諸芸能が奉納される。龍田大社の祭神は志那津比古・志那津比売という風神であり、この風のまつりは古来特に重要視され、盛大に行われているのである。

しかしこのように特別なものは暫くおき、ここでは県内の各村落で行われている農村行事としての風祈禱について紹介してみたいと思う。

◇ ◇ ◇

8月中旬から下旬にかけて「風日待」「風籠り」と称するお籠りを行うところが多くある。

天理市渋谷では毎年8月16日、氏神の水口神社でお籠りをする。夕方6時頃より村中の人がお籠り弁当を持って集まってくる。弁当は一旦神前に供え、お祓いをしていただいた後下げ、境内で焚火をかこんで食べる。昔は各戸より提灯を持ち寄り、境内に吊したという。

都祁村吐山では8月25日を風祈禱のお籠りの日としている。同日午後より各戸一つずつ

提灯を持って下部神社に集まり、参籠所の決められた場所に各垣内ごとに提灯を吊して車座となる。現在では簡略化されているが、昔はやはり籠り箱（弁当）を各自持って来た。ここではその日境内で盆踊りが行われ、夜の更けるまで続く。

一方村人が氏神の社に集まってその境内を何度も回り、風難よけの祈願をする村々もある。

奈良市和田町では8月15日（30年ほど前までは18日）午後より各戸一人ずつ出で村の天神社に集まる。境内に1本の榊が立てられ、一同裸足になって、社と榊の間を村の長老の打つ太鼓に合わせてぐるぐる回る「デンデコデン」という行事が行われている。昔は人々も口ぐちにデン・デン・デンデコデン、と唱えながら1時間以上も回り続けたという。

奈良市長谷町でも8月25日正午、日吉神社に集まって村の一老が神主となってお祓いをした後、青竹に御幣を括り付けたものを立てそこを3回まわる。奈良市史（民俗編）によれば昔は前日の夜より宮籠りをし、翌日各自20～30遍ずつ笹を持って回ったとの報告があ



▲デンデコデン（奈良市和田町）



▲祈祷念仏（東吉野村木津川）

り行事が簡略化されてきているのがわかる。今も行事の最後に御供餅撒きが行われている。

都祁村上深川では、8月18日八柱神社で風祈祷を行い、これを「ヒオクリ」「ヒマチ」と呼んでいるが、現在行われているのは、境内に御幣をつけた竹を2本立て、まず集まった各自がそれぞれ33本の割り竹を持って数取りをしながら回る（これをヒャクマンドとかイチマンドとか呼ぶ）。それがすむと村の長老が神主となって祝詞をあげ、お祓いをした後、これを先頭に全員で3回まわる。それが終われば近くの川よりきれいな小石3個をひろって、神前に供える。このようなことからこの行事はまた「ヒャクマンドのオコリトリ」とも呼ばれる。

コリ（垢離）トリを風祈祷として行うことは、室生村史などにも、榊や榊の葉を33回清浄な水にぬらして社殿の下に運ぶ（大野・深野）、川から小石を拾って33回の数取りをして社前に運ぶ（元三・琴引・中村・長瀬）という事例が報告されている。

仏教的な色彩の風祈祷の事例として東吉野村木津川の例を見ておくことにしよう。この行事は「二百十日の前祈祷」として毎年8月18日行われる。日が落ちる頃より人々が村の薬師堂に集まり始め、午後8時頃祈祷が始まる。村人が般若心経百巻を唱える中を円覚寺の方丈（住職）が大般若経理趣文及び回向文の読誦をする。祈祷が終わると供物が下げられふるまいの食事となる。さて、この村の風祈祷で特筆すべきことは、この後祈祷念仏として踊念仏を行うことである。村の年間の行事において踊念仏が行われるのはこの日だけだというのが、風祈祷についてのこのような事例は県内でもめずらしい。

以上奈良県内の村落における風祈祷の諸相を見てきた。それは概して複雑な所作や手続きが伴うこともなく、地味な行事であるため見過ごされがちである。

しかしそこには人々の素朴な共同祈祷の姿が今もよく伝えられ、人々と自然との関わりについて改めて考えさせられるものがある。

雨 乞 い

奥野義雄

大和における雨乞習俗は、すでに高谷重夫氏らの研究（『雨乞習俗の研究』）によって周知されているところであり、ことさら雨乞習俗について述べることもないであろう。

しかし、農耕儀礼の一習俗であり、特別テーマ展のアプローチとして、特色ある雨乞習俗に焦点を絞って紹介していくことにしたい。

いうまでもなく、大和の雨乞習俗で一般的なものとしては、ワラを村人が持ち寄ってトンドをするクモヤブリとか、ヒフリとか呼ばれている習俗がある。

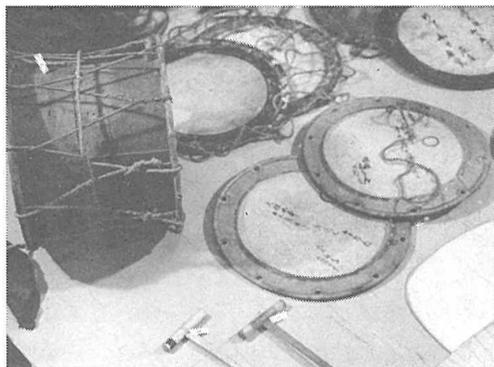
これに対して各地域（垣内あるいは大字）によって特色を表わす雨乞祈願がかって行なわれていたことを知る。

たとえば、奈良市日笠の天神社に奉納されている「馬図」のいくつかは、村人の伝承によるかぎり、雨乞祈願のためのものであったという。この習俗は、古代以来の伝統的な習俗が今日まで遺っていたことを示すものであるともいわれている。この日笠の雨乞習俗は、絵馬奉納だけでなく、さきに触れたダケノボリ、コウゼン詣り、赤馬廻り、そして雨乞踊（ここでは「勇め踊」といわれている）などの雨乞い方法があり、このいずれの方法を行なうかはフリアゲ（今日のクジのこと）によって決定されたのである。

このように日笠の場合には、雨乞習俗は毎年同じ方法によって行なわれるとは限らないが、現在の伝承によると、クモヤブリ（ヒフリと同じ内容）のほか、一乃至二つの雨乞方法

があった程度である。このことについては、日笠の雨乞習俗の事例が一つの課題をなげかけ、本来的にはムラにおいて多種多様の習俗があったものか、否かという点を提示するが、習俗の伝承の集積を必要とするため、ここでは即断しがたい。しかし、このような地域は少なくなかったであろう。

このことはともかく、香芝町狐井の「板仏」（ムラの人々はイタボットンと呼ぶ）も雨乞いにご利益がある〈仏さま〉として古くから言い伝えられている。この板仏の伝説は、古く平安時代後期にまで遡り、恵信僧都源信とかかわりをもつことは「板仏三尊縁起」によって知ることができる。しかし、この「縁起」が史実を表わすものであるか、否かはさだかでないが、今日まで恵信僧都が描いた阿弥陀如来三尊であると受け継がれていることは事実である。また、この板仏が雨（というよりも水というべきであろう）とかかわりあうのは、この伝説に〈川から流れてきた板〉のホトケさまであったことから、雨乞祈願に転化したものであろう。この転化は、単なる川→水→雨→雨乞という展開を示すだけでなく、昨年（58年）に物故者となった井村寅太郎氏（明治35年生）の語り伝えたところでは、この板仏を福応寺の本堂から運び出してタンボへ持って行き、タンボのまわりを念仏を唱えながら廻っていた情景を少年の頃見ていたということである。この板仏のタンボ廻りによって雨が降ったと語り伝えているのである。



▲南無天踊用具（飽波神社蔵）



▲大柳生の太鼓踊（奈良市）

このように〈ホトケ〉を雨乞祈願の対象・偶像として拝む事例は、各地域で伝承されている。ただ、この場合には、ほとんどが石仏であり、その偶像が〈地藏石仏〉であることが少なくない。

たとえば、上牧町五軒屋の雨乞地藏、安堵村窪田の雨乞地藏などが挙げ得るであろう（このほかに奈良市北之庄の雨乞地藏の石仏、下市町下市の雨乞地藏などがあるが、今回の展示では紹介していない）。



▲太鼓踊の唄本（山添村北野）

これらの雨乞習俗とともに寺の釣鐘を池に投げ入れる風習を川西町結崎の糸井神社蔵の「半鐘カタギ」図絵馬が提示してくれるが、このほかに五條市野原のムラでは、金剛寺の釣鐘をナワでしばって池まで荷担って、池に投げ込むという伝承がある。このような雨乞習俗もかつては、川西町結崎や五條市野原以外の地域でも行なわれていたのではなかろうか。

このように雨乞習俗には、各地域＝ムラの地理的環境（立地条件）や歴史的な要因などによって位置づけられた特色をもっているといえる。そして、各地域とも同様な習俗を示すといった二面性を携えているといっても大過ないであろう。

したがって、そこにこそ農村落の社会的要請としての習俗が表現され、農耕における水の確保の労苦が窺えるといえなくはないのである。

(1984. 7. 30丁)

特別テーマ展特集

秋 ま つ り

奥野義雄

現在、大和・奈良県下で行なわれている年中行事としての秋祭には、農村落ごとに特色のあるものが少なくない。

秋祭は、10月から11月初旬にかけて農村落で行なわれる稲刈りの時期にあたり、一種の収穫の儀礼としての要素をもつものと考えられる。

たとえば、川西町結崎の糸井神社の秋祭にみえる祭具の一つに初穂を竹馬に結びつけた柳の枝につけてトウヤ（当屋・頭屋ともいうこの場合には、トウヤの子供）が神社まで運ぶ一各垣内＝ムラから神社まで御渡りを行ないトウヤが持参する一という習俗は、この収穫を神とともに祝いかつ神へ感謝して供えるホカケの儀式を示しているといえよう。

この秋祭を営む農村落には、「宮座」という村落内の成員によって構成する組織があり、この「宮座」は、大和の各村落ごとに形成し、古く中世にまで遡り得るものが少なくない。

したがって、秋祭という儀礼も、「宮座」と

のかかわりで考えていかねばならないが、ここでは割愛して、行事運営（経営）主体の「宮座」によって営まれる行事内容に限定して触れていくことにしたい。この秋祭の行事・祭祀の営みについては、古く中世末期頃の年銘をもつ香芝町の鹿島神社宮座文書や曾爾村の門僕神社宮座文書、そして吉野町の吉野山口神社宮座文書（『大頭入衆日記』）などに詳しく記載されているので、ここでは繙かないが、すでに中世大和の宮座については触れておいたのでそれに譲ることにしたい（『中世村落における祭祀組織・宮座について』、『奈良県立民俗博物館研究紀要』第7号所収）。

この宮座によって営まれてきた秋祭＝祭礼は、多種多様な内容を保持し、今日私たちに表現してくれている。

たとえば、〈カミ〉に供える神饌においてもいくつか指摘し得るが、その一例として桜井市北山の手力雄神社の神饌＝御供は、挟箱の中に入れられて運ばれるが、この供え物には

鏡餅・赤飯・芋御供・牛蒡御供・はや餅・塩鯖などがある。

一方、儀礼・行事の内容をみると芸術的色彩が盛り込まれている秋祭も少なくない。

たとえば、曾爾村の門僕神社の奉納獅子舞や、山添村の神波多神社の渡御祭（御渡り）にみる田楽打ち（かつては「田楽祭」と称した）と渡御の先頭をつとめる獅子舞など枚挙に遑がないほどである（室生村の竜穴神社の獅子舞なども挙げることができよう）。とりわけ、山添村の場合、先頭を行く獅子舞は、本来渡御の折に奉舞されるのではなく、伝承に



▲神波多神社の獅子舞

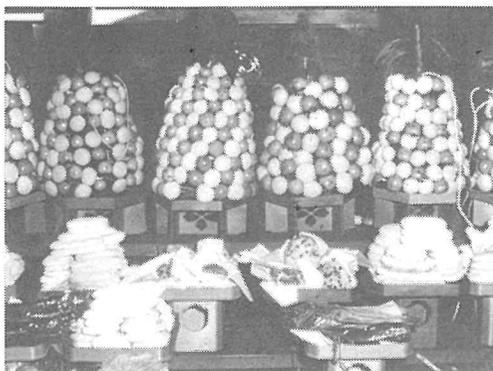
よる限り、本来田楽と同様に神社境内でいくつかの題目（演題）を披露したということであるが、今日ではこの姿はみられない。現在行なわれているのは獅子舞・悪魔払、そして参神楽のみであるが、かつてはこれ以外のものもあったということである。

このように秋祭に営まれる獅子舞を例に挙げても、祭礼の今日的様態と旧来の様態が異なり、本来的な祭礼における「獅子舞」の存在がどのようなものであったかということも課題である。そして、これとともに大和における秋祭にみる「獅子舞」を伴う祭礼や、「渡御」（本来的には「御旅所」の形態をもつものや神霊の分霊形態をもつもの）を伴う祭礼などが、本来同一形態のものが分かれたものか、あるいは別形態のものが現在に至っているものか、否かということも少なからず秋祭・祭礼を考えていく上で課題の一つとなる。

これらの課題は、古く中世村落における祭祀組織としての宮座が、往時にどのような祭礼内容を伴って営まれていたかということを検討すべき基点となろう（このような視点で、すでに別稿「大和の大神楽・獅子舞にみる二つの展開について」〈『まつり』第43号所収〉で指摘したつもりである）。

したがって、秋祭においても、このように農村落の人々が、いかに〈カミ〉に対して喜びを表現し、あるいは崇敬の念の内に崇れを感じながら、何を表わそうとしたのか、あるいは何を示そうとしているのかということを考える契機となり、今日にみる〈カミ〉と〈ヒト〉の交渉をみつめる機会になるのではないかと考えている。

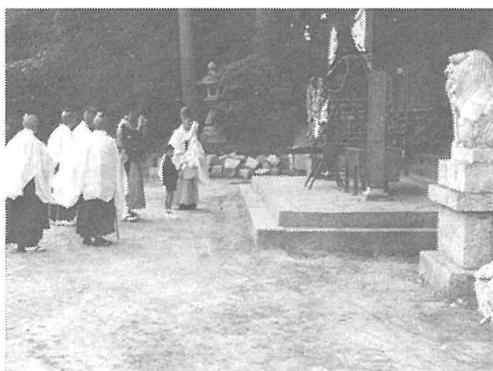
(1984. 8. 20了)



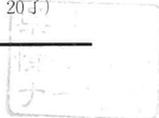
▲門僕神社の神饌



▲門僕神社奉納獅子舞



▲神波多神社の田楽祭



◆◆ 民俗公園短信 ◆◆

大和民俗公園では、59年度の完成を目指して鋭意建設を進めてきましたが、昨今の経済情勢から建設のテンポが遅くなっており、もうしばらくかかりそうです。

では当公園の最近の様子をお知らせしましょう。55年度に約2haある児童広場が完成し、全体で3分の2ほど出来上がったこととなります。広場はなだらかな南向きの斜面になっている芝生の広場を中心に、小高い丘の上にある展望台、大きな砂場、休憩舎、パーゴラ等があり、お昼ごろにはお弁当を食べたり、遊び回る博物館見学の小学生達で賑わいます。



▲小学生で賑わう公園

56年度からは水景園と呼んでいる博物館の北西部にあたる園地の整備を始めました。児童広場から入口広場、博物館へと続く、公園を一周する主園路、ハート形をした池を中心とした芝生の広場、林の中で自然に触れることの出来る林間散策園路等が出来る予定です。見晴しの良い児童公園とは少し趣が異なり、両側を山の緑に囲まれた落ちついた感じの水のある広場になることでしょう。58年度は宇陀東山集落の旧岩本家住宅と吉野集落の旧木村家住宅を結ぶ遊歩道を整備しました。舗装はまだですが、これで雨の日も安心して歩けます。

公園の中心を占める保存林は、アカマツがマツクイムシの害でかなり減りましたが、それを上回る勢いでコナラやクスギの雑木達、あるいはツツジの仲間が大きくなっており、後何年か経つと附近の様子もすっかり変わるかもしれません。

今や秋の花、ハギやススキが満開です。草むらからはそろそろ虫の音も聞こえます。今なら民俗学の勉強だけでなく、虫達とも仲良くなれるでしょう。(嶋田神夫記)

★★★★★ お し ら せ ★★★★★

● 民俗博物館の行事予定

☆特別テーマ展「大和の年中行事—稲作とまつり」

S59年9月7日(金)~10月13日(土)まで

◎今回の展示では、農村の稲作に関連した祭礼を中心に行事を紹介している。各コーナー▷オコナイ、オング祭、野神まつり、虫送り、虫祈祷、雨乞い、風祈祷、秋まつり、イノコ。

☆特別テーマ展・特別講演

S59年9月29日(土)「大和の年中行事」

講師・岸田定雄氏(近畿民俗学会理事)

S S59年10月13日(土)「芸能とまつり」

講師・守屋 毅氏(国立民族学博物館助教授)

※いずれも午後2時より

☆民俗カルチャー講座・民俗コースⅡ

S59年10月下旬から3回にわたって講座を行なう

予定(59/10/13~10/27→変更→10/27~11/10)。

※ 往復ハガキ応募制

☆体験学習講座「シメナワつくり」(定員80名)

S59年12月6日(木) 午後1時より

※ 往復ハガキ応募制

★ 予 告 ★

◎民俗カルチャー講座・民家コース

S60年3月10日(日)と3月17日(日)の2回の予定

【表紙解説】 収穫を直近にひかえ、あるいは収穫直後に、農村ではあわただしい日々を迎える。今年の豊作をカミに感謝するマツリゴトの準備と本番がひかえているからであろう。

この山添村中峯山の神波多神社の秋祭りも、毎年同じ日(10月15日)に行なわれ、村中がにぎわう。前日は宵宮で、祭礼当日にはお旅所(天王社)までお渡りが行なわれる。このお渡りの前に、神社境内で田楽や獅子舞が営まれ、カミに奉納される。この村人による営みの直前に神職によって村の役員や講中の役(当番・当屋)の列席上でノリト奏上やおハライが行なわれる。

■ 編集後記 ■

今年の夏は猛暑とっていいほどの暑さが続き、例年になく冷たさ、が求められた。この暑さが九月初めに引き継がれることを予期していたのだが、冷やかな想いで気候の変化が起った。朝夕の冷気と昼間の暑さが、あたかも地形の変動で断層ができたように訪れる。気候の差の激しい日々が続く九月上旬から中旬—これが九月の新しいかおかもしれない。

一方、この自然の変化に應える公園の樹木の強さと、戸惑いをみせる樹々の脆さとが重なり合う日々—これが九月の〈変化〉かもしんない。〈言葉〉では得られないところが、〈行動〉によって得られる九月の自然のペルソナがそこに在る。(x)